

さくらしまの 海

2026年 第30巻 第2号

115



生きものたちのいのちに寄りそう

水族館獣医師の仕事	2.3
いるかの時間・あざらしの時間「イルカのえさ」	4
ここがみどころ「3階：深海コーナー トワイライトゾーンの小型魚」	5
錦江湾のなかまたち「111. イサキ」	5
アクアラボ「魚のヒレの話」	6
特別企画展 「HITODE★EXPO 2026 かがしまヒトデ博覧会」	6
かがしま水族館で生まれるいのち	7
いおワールド通信	8
鹿児島 未知の魚を発見！「No. 45ホサノキウミヘビ」	8

水族館獣医師の仕事

皆さんは「獣医師」が診る生きものというと、どんな生きものが思い浮かびますか。犬、猫、鳥といった身近な生きものや、牛、馬、豚、羊、山羊といった家畜が思い浮かぶかもしれません。しかし、それだけではなく、ミツバチも法律では家畜に入れられていて、実際に「ミツバチの獣医さん」も存在します。かごしま水族館ではイルカやアザラシの他、魚やタコ、ヒトデといった生きものも患者さんです。

予防と早期発見

現在、かごしま水族館には3名の獣医師がいて、約800種の生きものの健康管理に携わっています。一番大切なのは病気にかからないことです。生きものがくらす環境や口に入る食べものを整えることが何より病気の予防に役立ちます。そのためには水温を調整する他、定期的な飼育水がきれいかどうか、大腸菌の数やアンモニア濃度などを調べます。また、えさの中に不足するビタミン剤などを加えたりもします。イルカやアザラシでは定期的に体重を測って、えさの量を調整しています。



投薬の準備

しかし、どんなに気をつけていても病気になってしまうことがあります。そんな時はいかに早く見つけるかがとても大切です。血液検査などさまざまな検査を行って、それほど具合が悪くないうちに病気を発見します。



イルカの血液検査

早期治療

検査結果をもとに、今どのような体の状態にあるのかを推測します。すぐに診断がついて病名が明らかになることもあれば、病名ははっきりしないまま治療を開始することもあります。えさを食べるようであれば口から薬を与えます。注射をしたり点滴をしたりすることもあります。魚などの場合は感染症などの治療のために薬を溶かした水の中を泳がせることもあります。



イルカの治療

忘れられない治療

2019年1月、ハンドウイルカのテンテンのお腹の中に5頭目の赤ちゃんが宿っていることが分かりました。これまでテンテンの赤ちゃんは生まれながらにして尾びれが根元からねじれていて水面まで泳げずに亡くなってしまうことが続いていた。今度こそ元気に赤ちゃんが生まれてくるようにと私たちは願っていました。しかし、出産まであと5か月となった7月の終わり、テンテンは急に体調をくずしました。ぐったりとするテンテン。お腹の赤ちゃんとともにテンテンが亡くなってしまうのではないかと不安な気持ちでいっぱいになりながら、毎日点滴をしていたことを思い出します。1か月後、テンテンはすっかり元気になりました。しかし、まだ心配は続きます。治療のために長時間水から出したり、さまざまな薬を投与したりしたため、お腹の赤ちゃんに影響がないともかぎりません。そして、翌年の1月、元気な赤ちゃん（ハッピー）が生まれました。そんなハッピーも現在は6歳。やんちゃな盛りです。



テンテンと赤ちゃんの頃のハッピー

さまざまな患者さんたち

患者さんはわずか2gのタツノオトシゴから1tを超えるジンベエザメまでさまざまです。体のつくりも違えば、かかる病気もさまざまです。1つの水族館で経験することには限りがあるので、初めて出会う症例も少なくありません。現在、日本には約70名の水族館獣医師がいて、そのつながりは強く、助け合いながら診療にあたっています。



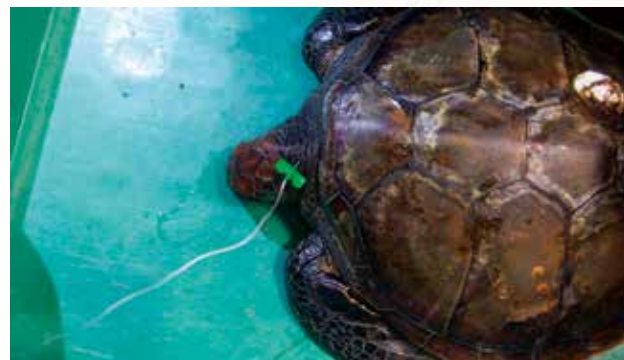
タツノオトシゴのなかま

ある時、メスのトラフザメがオスに噛まれてしまったことがありました。尾の先がなくなり、壊死を起していました。麻酔をかけ尾を切断する手術をすることにしました。口の中からえらに向かって左右交互に麻酔薬入りの海水を当て続け、長時間の手術が続きました。手術は無事に終わり、現在も元気に黒潮大水槽で泳いでいます。先日は卵を産み、無事に赤ちゃんもかえりました。



トラフザメの手術

三島村の硫黄島で保護されたアオウミガメを保護して治療したこともありました。搬入時は衰弱が激しくぐったりしていましたが、薬の投与や点滴、点眼などの治療を行い、11日後にはえさの海藻を食べるまでに回復しました。その後も血液検査結果や食欲行動が完全に回復するまで保護を続け、約2か月後に海にかえすことができました。今も元気に海を泳いでいるといいなと思っています。



アオウミガメの皮下点滴

アザラシを育てる

ゴマフアザラシのゴマリンが生まれた時のことです。生まれてすぐに高熱を出してしまい、お母さんアザラシから離して治療を開始することになりました。生まれたばかりの赤ちゃんアザラシには2〜3時間おきに授乳する必要があります。胃の中にチューブを入れてミルクを流し込みました。順調に育ち、えさの魚を食べ始め、白い毛が抜け落ちてゴマ模様になった時には心からほっとしました。



ゴマフアザラシの人工哺育



生後2か月の頃のゴマリン

さいごに

獣医師の仕事は楽しいことや嬉しいことばかりではありません。治療の甲斐なく生きものが死んでしまった時には「どうして助けられなかったのだろうか」「もっと他にできることはなかったのか」という思いでいっぱいになります。それでも続けていられるのは、生きものの「どんな時もただひたすら生きる」力強さに魅せられているからなのかもしれません。私たち獣医師としての仕事が少しでも彼らの助けになりますように。



イルカのエコー検査

いるかの時間
あむらしの時間

イルカのえさ

お客さまからよく「イルカは何を食べているの？1日どれくらいのえさを食べているの？」と聞かれることがあります。今回は当館で飼育しているハンドウイルカのえさについて紹介します。

「イルカは何を食べているの？」

現在、7頭のイルカに合わせて1日約100kgのえさ（マサバ、ゴマサバ、マイワシ、ハチビキ、ニシン、カタボシイワシ、ボラ、スケトウダラのフィレ、キハダ・メバチの血合い）を与えています。鮮魚を毎日使用するの、コストや量の確保、寄生虫の感染などの問題から現実的に難しく、冷凍されたものをえさとして使用しています。

イルカのえさを選ぶ時に一番重要視しているのは、「品質」です。私たちも鮮度の悪いものを食べた時、お腹を壊してしまったり、病気になったりすることがあります。それはイルカも同じです。そこで、新しい餌料を使う前に必ずサンプルを取り寄せて、飼育担当者が確認します。えさの魚の体表や目、えらの色などを目で見て確認し、さらに魚をぶつ切りや三枚おろしにして、内臓の様子、胃内容物の臭い、肉質などを検査し

ます。その上で品質に問題がなければイルカのえさとして導入します。新しく使用する魚はロット（同じ条件下で冷凍されたもの）が変わるたびに栄養分析（カロリー、タンパク質、脂質、炭水化物、水分、灰分）も行っています。

「1日にどれくらいのえさを食べているの？」

現在、かごしま水族館のイルカは1日に1頭当たり5kg～17kgのえさを食べています。私たちも年齢や性別、体形の違いなどで食べる物や量が異なりますが、イルカも同じです。2025年2月24日に生まれたユキはまだ子どもで、お母さんイルカのマールの母乳を飲んでいて、他のイルカより少ない1日5kgのえさを食べています。マールはユキに母乳を与えていて、多くのカロリーを必要とするので、他のイルカよりも多い16.5kgのえさを食べています。

7頭の体重は120kg～300kgとそれぞれ違っており、運動量や定期的に行う採血の結果をもとに、イルカ一頭一頭、与えるえさのカロリー、水分、脂質などを計算してえさの量を決めています。（大瀬 智尋）



サンプルのマサバ



三枚おろしにして、身の状態や胃内容物の臭いを確認



えらの色を確認



ぶつ切りにして身の状態を確認

2026年7月 給餌表

	サバ類	ニシン	ボラ	マイワシ	ハチビキ	合計(kg)	カロリー(kcal)
マール	5.0	1.5	2.0	4.0	4.0	16.5	23560
ユキ	2.1	2.5	0.0	0.4	0.0	5.0	5760



3階：深海コーナー トワイライトゾーンの小型魚

「深海底にそびえる岩礁地帯」水槽でトワイライトゾーン（光が僅かにのみ届く水深50～200m程の深場）に生息する小型魚5種の展示を開始しました。アズマハナダイ・スミツキハナダイ・ホシヒメコダイ（ハナダイ科）とアカホシキツネベラ（ベラ科）は薩摩半島南岸沖（沖秋目島沖）、オキトラギス（トラギス科）は錦江湾奥部で実施した水深100～150m前後での船釣りによって採集されました。

ハナダイ科を代表とするトワイライトゾーンの小型魚は鮮やかな色彩のため観賞魚としても人気が高いですが、水圧や水温の変化に敏感なため、元気な状態で採集するのは難しいことが知られています。現在展示している魚たちは水圧変化によるダメージが少



なくなるよう慎重に釣り上げ、水温の変化に気を付けて適切な処置や治療をするなど、さまざまな工夫の末に展示が叶いました。どの魚も展示水槽に入れてすぐは落ち着きがなかったですが、しばらくすると岩の陰や砂底の凹んでいる場所などそれぞれの個体がお気に入りの場所を見つけたようです。驚くほどに鮮やかなトワイライトゾーンの魚たちの小さな体に詰まった大きな魅力をご堪能ください。（中村 潤平）



錦江湾の なかまたち

111. イサキ



イサキ（幼魚）



イサキ（成魚）

鹿児島県本土の沿岸でよくみられる魚で、岩礁域に生息し大きな群れをつくります。夜行性で暗くなると浅場へ移動して小型の甲殻類などを捕食します。梅雨から夏にかけての猛暑をさけた夜釣りでは大型の個体が数多く釣れることがあるため、磯釣り師にとって格好のターゲットになります。年間を通して

流通し、県内の鮮魚店などでもよく見かけます。

イサキの漢字表記の1つに「鶏魚」があります。その由来は背びれの棘条がニワトリのトサカに似ているためで、これは英名のChicken gruntも同じ理由です。gruntは「ブーブー鳴く」という意味ですが、釣り上げられると「グーグー」と音を出すためです。

幼魚には、体側に鮮やかな黄色の縦縞が3本入ります。これがイノシシの子どもに似ていることから「ウリボウ」とも呼ばれます。この模様は、海藻や岩場に紛れ込んで大型の肉食魚などから身を守る「保護色」の役割を果たしています。成長すると縞が消え、落ち着いたオリーブ褐色へと変化します。

イサキは4階「かごしまの海コーナー」で展示しています。美しい色彩をもつ熱帯魚や、巨大な回遊魚のような分かりやすい派手さはありませんが、渋く気品ある姿を観察してみてください。

（久保 信隆）



魚のヒレの話

魚は水中でひれを上手に動かして泳ぎ、バランスをとります。多くの魚には尾びれ・背びれ・胸びれ・腹びれ・しりびれの5種類7枚のひれがあります。尾びれは体の後ろにあるひれで左右に振り動かし、泳ぐために使います。腹びれは上下に動くときに使い、背びれとしりびれはバランスをとるため、胸びれは泳ぐ方向を変える時や、その場に留まる動きをするときに使います。

魚の中には、特別なひれを持つものがいます。コバンザメは背びれが変形して吸盤状になっており、大きな魚にくっ



コバンザメの吸盤状に変形した背びれ

くことができます。自分では泳がずに移動し、大きな魚のえさのおこぼれを食べてくらしています。ホウボウは、胸びれの一部の軟条が足のような働きをします。遊離軟条と呼ばれており、これで海底をはい回ったり、えさを探したりします。マンボウは背びれとしりびれを使って泳ぎ、泳ぐ方向を変える時には、体の後ろにあるマンボウ独特のひれ、舵びれを使います。外海を泳ぐカツオは、体形が紡錘形をしていて泳ぐのに適した体をしています。大きな尾びれは、推進力を生み出し、背びれや胸びれは泳ぐ時に抵抗にならないよう収納できるようになっています。



ホウボウの遊離軟条



マンボウの舵びれ

水中を自由自在に泳ぐ魚たちがどのようにひれを使い、動かすのか、時にはひれの形や大きさ、動きに注目して観察してみませんか。(吉田 明彦)

とくべつ きかくてん 特別企画展

HITODE★EXPO 2026 かごしまヒトデ博覧会

2026年7月17日(金)～11月3日(火・祝)

今回の特別企画展、テーマはヒトデ。星型のシルエットで誰もが知る“海のスター”でありながら、水槽の中では脇役になりがちな「ヒトデ」。そんなヒトデたちにスポットを当て、主役としてその魅力を余すことなく解き明かします。

会場にはさまざまな種類のヒトデが大集合。一見すると動かないように思える体の特徴や、えさを食べる様子、知られざる繁殖生態や身を守る方法の秘密など、驚きの発見が詰まった展示が展開されています。フォトスポットやクイズで学ぶことができるコーナーもあります。展示を見た後はヒトデ検定に挑戦してみ



てくださいね。

子どもから大人まで、知っているようで知らないヒトデの真の姿を楽しみながら学べる貴重な機会です。この夏から秋にかけて、奥深いヒトデの世界を深掘りしに、ぜひかごしま水族館へ足を運んでみてはいかがでしょうか。(築地新 光子)

かごしま水族館で生まletたいのち

水族館の役割

水族館は生きものを収集し展示するだけでなく、育成し、研究する役割も担っています。それには飼育している生きものの「繁殖」も含まれます。繁殖とは動物が交尾、産卵・出産、育児などをして新しいのちを生み出し、種を未来へつないでいくことです。自然界では環境の変化や生息地の減少などにより多くの生きものがこの繁殖の機会を失いつつあります。水族館で生きものの繁殖を行うことは種の保存や生態の解明、生物多様性の保全にもつながる重要な取り組みです。

生まletたいのち

当館で繁殖に成功した生きものはこれまでもたくさんいます。アマモ水槽にいるアミメハギもその1つで、現在展示している個体は水槽の中で生まれた個体です。今回はそんなアミメハギの生まletしてから今に至るまでの成長過程を紹介します。

アミメハギは大人でも体長8cmほどにしかならない、小型のカワハギのなかまです。藻場やアマモ場に生息しており、夜になると海藻をくわえて流されないようにして休む姿が見られます。

親個体もアマモ水槽で飼育をしていました。産卵が近いメスは、産む場所を探してうろうろ泳ぎ始めます。そんなメスを何匹かのオスが遠巻きに見守ります。オスは卵が産みつけられた瞬間に急いでメスのもとへ近づいて放精します。そのために卵が産みつけられるのを待っているのです。いざ卵が産みつけられて、いち早く駆け付けたオスがそのあと卵を守る親となります。オス親は卵の前で酸素を送るために口で水を吹きかけたり、近づいてくる他の魚を追いついたりして卵を守ります。

卵は水槽の排水口のネットに産み付けられていました。そのままだと卵からふ化したとたんに水槽にいる魚たちに食べられてしまうため、別の水槽に移してふ化させました。



産み付けられた卵



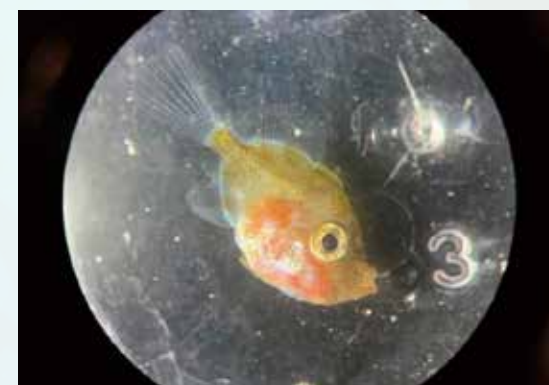
ふ化直後の仔魚(0日齢)

ふ化直後の仔魚のお腹にある黄色い部分は卵黄で、口が開くまではこの卵黄の栄養を使って成長します。まだ目もできておらず、ふわふわと水中をただよって過ごします。2日齢になると胸びれが確認できます。0日齢では確認できなかった目もできて少しずつ魚らしい形に成長していきます。4日齢には卵黄は吸収されてなくなり、特徴的な背びれの突起が発達してきます。このころには口も開き、おなかの中にえさとして食べたワムシが見えます。



11日齢

11日齢では、腸や肛門も目で確認できます。この後生まletしてから3週間後にはワムシより大きなアルテミアも食べることができるようになりました。



54日齢(約2か月)

約2か月経つと、親とほとんど同じ色、形にまで成長しました。このころには口より少し大きいものもつついて食べるようになり、1年後には親とほぼ同じ大きさになります。



1年後

現在展示しているのは生まletしてから約2年経った個体で、すでに卵を産むようになりました。今後も繁殖への取り組みを続け、種の保存・生物多様性の保全に努めたいと考えています。

(新山 美侑)

いおワールド 通信

にゅうかんしゃ
入館者1900万人

かごしま水族館は、令和8年6月21日に入館者数1900万人を達成しました。記念すべき1900万人目のお客さまは、熊本市からお越しの藤本夏瑚さんです。夏瑚さんは6月21日に3歳のお誕生日を迎えられ、そのお祝いもかねてご家族で来館されました。当日は記念セレモニーを開催し、下鶴隆央鹿児島市長より記念証と記念品のジンベエザメのぬいぐるみが贈られました。これからも皆さまが海の魅力に触れながら楽しいひと時を過ごせる水族館を目指して職員一同努めてまいります。引き続き応援をよろしくお願いします。(谷口 哲也)



とくべつ きかくてん はつばい 特別企画展オリジナルグッズ発売！

第79回特別企画展「HITODE★EXPO 2026かごしまヒトデ博覧会」の開催にあわせて2種類のオリジナルグッズが誕生しました！

1つは魚イラストレーター・友永たろさんとコラボした「ヒトデ★マグネット」です。ヒトデが岩や壁にはりつく姿から着想を得たマグネットで、シークレット含む全6種をカプセルトイでお楽しみいただけます。もう1つはカラフルなヒトデが大集合した「ヒトデ★魚朱印」です。企画展担当者が消しゴムはんこを彫った渾身の力作です。

どちらも「ヒトデの魅力をもっと伝えたい!」という熱い想いを込めて、担当者が企画から制作まで手掛けました。数量限定につきなくなり次第終了です。来館の記念やお土産にぜひアミューズメントショップでお買い求めください。(二階堂 梨沙)



シリーズ 鹿児島 未知の魚を発見!

No. 45 ホサノキウミヘビ



ホサノキウミヘビ *Brachysomphos longipinnis*

本種はこれまで世界でも台湾海峡で採集された最大全長64センチの少数個体のみが知られており、分類学的・生態学的な情報が乏しい、謎に包まれたウミヘビでした。その後、薩摩半島西岸において全長1メートルを超える本種2個体が漁獲され、2026年7

月にホサノキウミヘビと命名されました。「ホサノキ」あるいは「ホサ」とは、鹿児島県でシイタク栽培に使用される榎木の樹種を指す呼称で、当地では一般にコナラやクヌギを指します。新標準和名は本種の体表にみられる特徴的な縦じわと体色がホサノキを連想させることに由来します。

(鹿児島大学総合研究博物館 館長 本村 浩之)

編集後記

街を歩けば不自然なほど整った広告が目に入り、スマホを開けば本物顔負けの画像や動画がまたたく間に拡散される時代になりました。AIの急速な進化や普及、また環境や経済の急激な変化により、社会は大きな転換期を迎えています。同時に、既存の物事の価値も大きく変化しています。果たして、私たちはこの目まぐるしい現状に追いつくことができているでしょうか。嘘や虚構が我物顔で蔓延する中、情報を見極め選び取る力を身につけることは、今後ますます難しくなるかもしれません。

当館は来年で開館30周年を迎えます。大きな節目を前に、「命」と向き合うこと、「生きものの生きざま」を伝えることの意味や役割についてあらためて問い直されているように感じます。

(二階堂 梨沙)

